

149

2025 SUMMER

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 20

島村光《貌》
平成30(2018)年
備前土
高41cm

響きあう絵画—宮城県美術館コレクション カンディンスキー、高橋由一から具体まで

廣瀬 就久(主任学芸員)

1981年に開館した宮城県美術館は、宮城県や東北地方にゆかりのある作家の作品とともに、カンディンスキー(1866-1944)やクレー(1879-1940)など、海外作家の作品も多く所蔵しています。

大規模改修工事による長期休館のため開催する本展では、約7,000点に及ぶコレクションから厳選された74点の名品を紹介します。

1 日本の美術 明治期

同館開館から100年前の1881年、高橋由一(1828-94)は山形県令である三島通庸^{みちつね}の委嘱を受け、山形県下にある新道開発の記録画等を描くために東北を訪れました。その際、由一は宮城県からの依頼で《宮城県庁門前図》(図1)や《松島五大堂図》などの宮城県を代表する風景を、油彩画による記録画として制作しました。

近代洋画黎明期の美術として、由一が西洋の技法である油彩画を学んだ、イギリス人の報道画家ワーグマン(1832-91)の作品や、日本初の官立の工部美術学校で西洋画を学んだ、小山正太郎(1857-1916)などの作品を展示するとともに、明治中期にフランスの外光表現をもたらした黒田清輝(1866-1924)に学んだ、宮城県出身の画家、渡辺亮輔(1880-1911)の作品も展示し、明治期の洋画の展開を紹介します。

2 日本の美術 大正期

1910年、美術の動向に大きな影響を及ぼす、二つの象徴的な出来事がありました。一つは文芸誌『白樺』の創刊であり、もう一つは高村光太郎による『スバル』誌上での「緑色の太陽」の発表でした。『白樺』にはセザンヌやゴッホ等の美術が紹介されましたが、明治も終わり頃になると、西洋の美術書や雑誌も発刊とほぼ同時に輸入されるようになり、西洋美術が次々と紹介されるようになりました。これらを通じて画家たちは、ポスト印象派やキュビズム、未来派、表現主義等の理論やスタイルを貪欲に吸収していきました。芸術表現の拡大と、太陽を緑色に描いてもよいというような、芸術家の自我を開放する思想の広まりを背景に、画家たちは「個」の表現を追求していったのです。

萬鉄五郎(1885-1927)や岸田劉生(1891-1929)、神原泰(1898-1997)などの作品には、これらの新しい動向が見て取れます。そうしたなか、実際に海外に留学する画家も増加し、梅原龍三郎(1888-1986)や安井曾太郎(1888-1955)は、西洋での経験を踏まえて、帰国後、日本人の感性や美意識に根差した油彩画表現を追求し、昭和の美術界をリードする存在ともなりました。

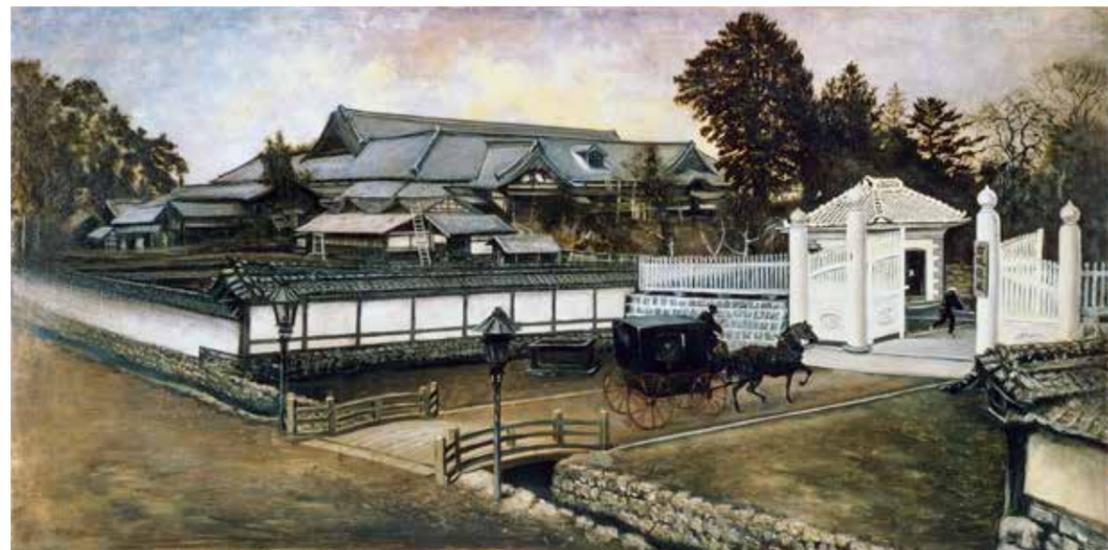


図1:高橋由一《宮城県庁門前図》1881年

3 日本の美術 昭和期

昭和期には日本の洋画も成熟し、フォーヴィズムやシュルレアリスム、抽象画など様々な画風が展開され、日本独自の油彩画も追求されました。一方で、戦争や都市化に伴う社会問題などが、画家たちにも大きな影響を与えました。松本竣介(1912-48)の《画家の像》(図2)は戦時下の自画像であり、画家としての覚悟が感じられる、昭和美術の代表作です。大沼かねよ(1905-39)や曹良奎^{チョウランギョ}(1928-)は、社会的な主題を通して人間を見つめる作品を描きました。

戦後は美術の概念がさらに多様化し、新たな技法や材料も使われました。山口勝弘(1928-2018)はガラスを用い、見る角度によって様相が変化する作品を、村上善男(1933-2006)は注射針などを用いたアッサンブラージュを発表しました。1954年に結成された具体美術協会で、天井から垂らした紐にぶら下がり、床に置いたカンヴァスの上を滑るように足で描いた行為の痕跡を作品とした白髪一雄(1924-2008)、絵具の流れる様を表現に取り入れた元永定正(1922-2011)、対照的に、絵具の物質感や行為の偶然性を極力排除し、自らの手で円を描くことでオリジナリティーを示した吉原治良(1905-72)、仙台市出身で《アルファからオメガまでⅡ》(図3)のような線による幾何学的絵画を描く菅野聖子(1933-88)などが活躍しました。

○ 洲之内コレクション

「気まぐれ美術館」のエッセイで知られる文筆家であり、同時に画廊主であり美術収集家でもあった洲之内徹(1913-87)が、最後まで手放さなかった個性的なコレクションです。1988年に宮城県美術館にまとめて収蔵されました。中村彝(1887-1924)から曹良奎まで15点を選んで紹介します。

4 カンディンスキー、クレーとドイツの20世紀美術

カンディンスキー(ロシア出身)とクレー(スイス出身)は、ともに19世紀末に「芸術の都」ミュンヘンに渡りました。初期のカンディンスキーは風景の写生に熱心に取り組み、またロシアやヨーロッパの中世に思いをはせた空想上の光景を描きました。クレーは天性のユーモアを乗せた線描による、エッチングの作品群で画壇にデビューしました。

色や形のもつ「内なる響き」が絵画の本質だと考えたカンディンスキーは、やがて抽象絵画の扉を開きます。1911年末に「青騎士」の発足を主導し、同じ頃にクレーと知り合いました。カンディンスキーは《「E.R.キャンベルのための壁画No. 4」の習作(カーニバル・冬)》(図4)を描きます。しかし第一次世界大戦の勃発により帰国を余儀なくされ、「青騎士」の活動は終わりを迎えました。

穏やかな具象絵画から知覚を揺さぶる刺激的な表現まで、多彩な絵画が響きあう展示空間が姿をあらわします。

少し遠いところから名画たちがやって来る、またとない機会です。お見逃しなくご観覧ください。

【特別展】「響きあう絵画—宮城県美術館コレクション カンディンスキー、高橋由一から具体まで」
(会期:2025年7月4日～8月24日)

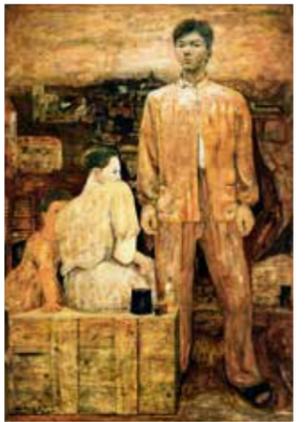


図2:松本竣介《画家の像》1941年



図3:菅野聖子《アルファからオメガまでⅡ》1970年
@Akiko Okamoto



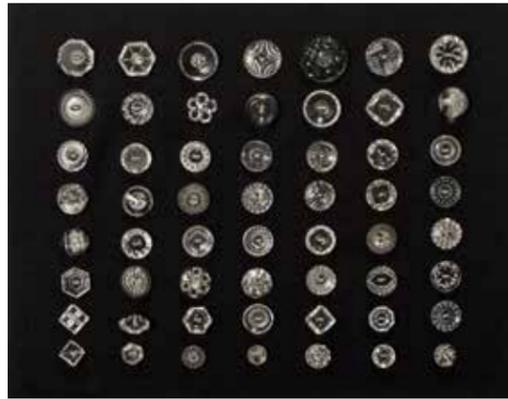
図4:ヴァシリー・カンディンスキー
《「E.R.キャンベルのための壁画
No.4」の習作(カーニバル・冬)》
1914年

※作品はすべて宮城県美術館蔵

ボタンコレクション

特別展示「ときめきのボタンたち—加藤コレクションから」より

佐藤 千裕 (学芸員)



クリアガラス／1930年頃／チェコ

加藤喜代美氏は藍染作家として国内外で数々の賞を受賞されているほか、フェルトや和紙の作品、こだわりの布を使用した洋服やバッグの制作など多彩な活動をされている。またコレクターでもあり、ボタンをはじめヨーロッパのレースや古い紙、リネンの布、穀物袋などをコレクションしている。昨年夏、第11回I氏賞大賞作家の李侖京氏の個展で当館の古川学芸員が会ったのが加藤氏だった。ボタンを16,000点以上収集されているというお話を聞き、すぐに赤磐市のご自宅に伺った。見たことのない凝った装飾が施された美しいボタンの数々。壁、棚、机一面に飾られたボタンに胸が躍るとともに、とても個人のコレクションとは思えない数のボタンに圧倒された。特別展「ベル・エポック—美しき時代」(2025年4月11日～5月18日)とあわせて紹介できたら、ということでも話が済み、上司とともに視察に同行した私が本展を担当させていただくことになった。

私にとって初めての展覧会担当で右往左往しつつ本展の準備を進めていく中で、個人コレクションの魅力に気付かされた。

額装されているボタンはすべて加藤氏がひとつひとつカードやシート、額のマットに縫い付けたもの。ほとんどのボタンが素材別に額装されており、そこからさらに色、大きさ、形、モチーフ別などで分けられる。額内のボタンの並べ方やボタン同士の組み合わせもボタンをより魅力的にみせるためにと考え抜かれた加藤氏のセンスが光る。カードに縫い付けてあるボタンはその状態で販売されていたものもあるが、加藤氏がそのボタンに合うカードを見繕ったものも多い。カードやシートによってボタンや額全体の雰囲気もまた違って見える。

ボタンの種類によって収集している数にかたよりのあることも特徴的である。素材別にみると最も多いのはガラスボタンで、コレクションの約半数を占めている。無色透明のクリアガラスのボタンは加藤氏がボタンを集めだしたきっかけとなったもので、光にかざすとキラキラと輝くそのボタンに魅了されたという。透明のクリアガラス、不透明のオパイクガラス、ブラックガラス、ラインストーンガラスなど多種のガラスボタンがあり、それぞれの生産・流通数の違いによるものもあるが、ガラスボタンの中でも種類によって数が異なる。

個人コレクションは個人の深い想いで集められたものであるがゆえ、コレクター自身の好みやこだわり、センスが凝縮されている。ボタンの魅力とともにそうした個人コレクションの醍醐味を感じていただける展覧会にできればと思い取り組んだ。ボタンはその時代の歴史や文化、美意識が込められた「小さな芸術品」。その奥に広がる大きな世界を感じてもらえたら、という加藤氏の想いが伝わったとするならば本望である。



セルロイド／1930-40年代／アメリカ

近現代岡山の美術家とキリスト教—小田宏子の場合

橋村 直樹 (学芸課長)

現在、近現代日本美術史の文脈において、キリスト教と関わる美術家や作品に焦点を当てた展覧会の準備を進めている。本展では、主に明治から現代に至るまでの日本美術におけるキリスト教の影響を多面的に探ると同時に、岡山ゆかりのクリスチャンの美術家とその表現に着目する章を設ける予定だ。これに関連して、美術館ニュース147号より「近現代岡山の美術家とキリスト教」という連載を開始し、これまで坂田一男と定方塊石を取り上げ、彼らとキリスト教との関わりを紹介してきた。今号では、岡山出身のクリスチャンの美術家である小田宏子(1940-2015)にスポットライトを当てたい。

小田宏子は、綿を雁皮紙で包んだ温もりある立体作品で知られるが、その美術家としての歩みは絵画から始まった。岡山県倉敷市に生まれた小田は、高校時代、河原修平が主宰する倉敷素描絵画研究所で学び、そこで最晩年の坂田一男と出会うという貴重な縁を得ている。1958年に岡山大学教育学部特設美術学科へ進学後、河原主宰の燈灰会とうそくかいに参加し、1960年と翌年の岡山県美術展覧会で連続して最高賞である山陽新聞社賞を受賞した。大学卒業後は美術教師を経て、結婚を機に名古屋へ移住するが、その後も主に岡山県内で作品を発表し続けた。

名古屋で子育て生活を送る中、1974年に現地のバプテスト教会で洗礼を受け、クリスチャンとなる。晩年に「日常生活と信仰生活、作家生活を分けずに生きること、もしかすると中途半端になるかもしれないが、あえてそれを望んだ」^{*1}と語ったように、小田は、主婦として、信仰者として、アーティストとして、三位一体の人生を歩み続けたのであった。

1980年に家族とともに倉敷へ戻ると、以前にもまして制作活動に力を注ぎ、カンヴァス上の絵具を拭き取る「擦る」シリーズを開始した。半抽象表現から完全な抽象表現へと移行し、その後は、切ったカンヴァスを襞のように掴んで支持体に固定する「掴まむ」シリーズや、無数の切れ込みパターンを施したカンヴァスを重ねる「切る」シリーズへと展開していく。さらに1997年には、初めて紙を用いた作品を発表し、2000年からは綿を雁皮紙で包み、ステープル針で固定する立体作品「包む」シリーズを始めた。

小田はかねてより「不可視なる存在」を表現することを追求し、「見えないものとは、“そこに在る”との仮定からしか掴むことができない」^{*2}と考えていた。その信念が結実した「包む」シリーズは、「不可視なる存在」への問いかけであると同時に、祈りの形でもあった。また、《イバラ紋》《くもの柱》といった作品タイトルには、キリスト者ならではの精神が色濃く反映されている。さらに、「擦る」「掴まむ」「切る」「包む」といった繰り返す制作行為自体が、彼女にとって祈りそのものであったのだろう。

準備中の展覧会では、「包む」シリーズの作品を展示する予定だ。小田宏子が追求した「不可視なる存在」への問いと、祈りを具現化したかのような作品群に、ぜひ注目していただきたい。

*1: 小田宏子『小田宏子の仕事』2015年、7頁

*2: 同上、18頁



小田宏子《イバラ紋》2014年 本館蔵

新収蔵品紹介

File 27

松島白虹
《新秋》

橘 凜(学芸員)



松島白虹《新秋》昭和5(1930)年 本館蔵

松島白虹(1895-1937)は岡山市出身の日本画家。東京美術学校日本画科に進学し、結城素明(1875-1957)や松岡映丘(1881-1938)に学ぶ。大正7(1918)年の第12回文展に初入選して以降、官展で入選を重ねたが、道半ばの数え43歳で病没し、現存作品は限られている。昨年度当館が購入した本作品は第11回帝展入選作で、現状唯一完存する白虹の官展出品作として貴重である。

本作は高さ約250cmの大作。青い着物の断髪の少女がしゃがみ込んで犬を抱き寄せる様子を、画面中央にほぼ等身大で描く。少女は両手を犬の首元でからめており、大人しく少女に寄り添う犬との親密さが感じられる。少女の周りを囲むように、画面の周辺を葉鶏頭、向日葵、朝顔といった植物が飾る。植物は細かく描写され写実的であり、特に向日葵に関しては、花の中央の黒い部分の凹凸を絵の具の盛り上げで表現するほか、季節の移ろいを意識したものだろうか、葉が枯れて萎びた様子まで詳細に描いていることが注目される。また画面全体に金砂子を散らし、作品の華やかさを演出している。

少女の装いは和服だが、描かれた犬が洋犬であることから、本作は西洋化が進む同時代の新興風俗を題材とした作品と見なせる。白虹の官展出品作を図版で確認すると、本作以前では朝鮮や中国の風俗に取材する作品が多数を占めているが、本作の翌年の帝展入選作《春苑午後》で中国民族衣装の女性を描いたのを最後に、それ以降は現代女性を題材とした作品を続けて出品している。例えば昭和7(1932)年の第13回帝展入選作《さへづり》ではワンピースを着た少女を、またその翌年の第14回帝展入選作《窓》では断髪・洋服の女性が、窓辺でピアノを弾く様子を描く。

女性を題材に新興風俗を取り上げる作品は、近代日本画壇においては、大正末期から徐々に増えていた。白虹作品の主題の変化はその流れに沿うものであり、中でも本作は彼が現代女性像に取り組みはじめる転換期の作品だったと推測される。

本作および松島白虹についての詳細は、『岡山県立美術館紀要第15号』(2025年)に所収の鈴木恒志「日本画家・松島白虹の来歴と作品」をぜひ参照されたい。

展覧会スケジュール

6月
June

5月27日|火|—6月29日|日|

【岡山の美術展】
備前細工物 古備前から現代まで

備前焼の造形ジャンルのひとつである細工物の特集。古備前から近代の金重陶陽や三村陶景らの作品、そして現代における新たな造形表現としての細工物を紹介する。

*最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

7月
July

7月4日|金|—8月24日|日|

【特別展】
響きあう絵画 宮城県美術館コレクション
カンディンスキー、高橋由一から具体まで

1981年に開館した宮城県美術館は、日本の近現代美術、そして宮城と東北の美術、表現主義を中心とする海外の美術を軸に、約7,000点に及ぶ作品を所蔵しています。所蔵品の原点である高橋由一とヴァシリー・カンディンスキーをはじめ、明治から昭和戦前期までの日本の洋画家たち、グループ「具体」などの戦後美術をリードした画家たち、ドイツ表現主義の系譜をなす画家たちなど代表的な作品を紹介します。

7月12日|土| 14:00-15:30

記念講演会 「カンディンスキー、クレーと青騎士の時代」

講師 小檜山祐幹氏(宮城県美術館副主任研究員)
会場 2階ホール(当日先着、定員170名) ※要観覧券(半券可)

7月26日|土| 14:00-15:30

美術館講座 「高橋由一から具体まで
—宮城県美術館コレクションを中心に」

講師 廣瀬就久(主任学芸員)
会場 地下講義室(当日先着、定員70名) ※要観覧券(半券可)

8月
August

9月
September

前期:9月4日|木|—7日|日|
後期:9月11日|木|—14日|日|

第76回 岡山県美術展覧会

収蔵品の紹介
Vol. 20

島村光《貌》
平成30(2018)年
備前土
高41cm



現代備前において独自の細工物を成す島村光(1942-)。古備前を手本にほぼ独学で作陶を始め、デビューも50歳を超えてから。十二支に猫を加えた《十三支・おくれた猫》など詩情豊かな作品が人気。細い管や円環で複雑に構成された本作は自画像という。高い技術力が異彩を放つとともに、若い頃に憧れたという前衛美術の残り香がする。(福富)

万博関連大規模展を巡って

守安 収

関西地方にて万博と軌を一にする大規模展が開催され、連日大混雑の大賑わい。私も大阪市立美術館『日本国宝展』、奈良国立博物館『超国宝展』、京都国立博物館『日本・美のつぼ展』などを3日かけて観覧。これまで現地や展覧会の会場で鑑賞したことがある出品作は数あるも、より深く係わった作品の前には特別な感慨にふける自分がいました。物忘れが常態化したこの頃なのに、いろいろな記憶が蘇ってくるのです。▼拝借したことはありませんが、《百済観音像》(法隆寺)は大学2年時のレポートに選び、自分が美術史専攻生であることを意識した仏の像。若き運慶の手になる《大日如来坐像》(円成寺)は、まだおむつが取れない長女を連れて柳生街道沿いの緑の美しい地を訪ねて出会った作。《吉備大臣入唐絵巻》(ボストン美術館)は、岡山ゆかりの美術を旗印に掲げるわが館にとっていまだ届かぬ憧れの作。《重源上人坐像》(東大寺)は備前を東大寺造営料国にし、当地に幾つもの事績、遺跡を伝える上人の最晩年の御姿を写実性豊かに表現した作。岡山県立博物館勤務時代に、本作を模したとされる播磨浄土寺の像(1234年作)を借用したことがありました。▼他方、雪舟筆《四季山水図巻(山水長巻)》(毛利博物館)や俵屋宗達の《風神雷神図屏風》(建仁寺)は私どもにも展示歴有り。この度はいずれも大人気で十重二十重の大渋滞。でも岡山では、前者は閉館30分前になると一人で16メートルを独占状態。ある識者は、名品はこの館でみるに限ると申しました。それは誉め言葉?しかるに後者は、今回の京都を凌ぐ大行列。人の動きを読むのは難しく、展覧会の運営に完璧はあり得ません。



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

中西ひかる

今年の梅雨は涼しい日が多いようで、じめじめはしているものの暑すぎず、比較的過ごしやすいような気がしています。さて、今号の見開きでは、これからやって来る夏の特別展についても紹介しているのですが、編集後記では、同時期に開催する「岡山の美術展」についても少しだけ触れたいと思います。今回は、コレクションを3つのテーマからジャンル横断的に紹介するとともに、戦後80年という節目にあわせて、戦災を題材とした作品なども取り上げます。特別展チケットでもご観覧いただけますので、ぜひ2階展示室にも足をお運びください。